

— 徳は本なり、財は末なり —

昨年発足した安倍政権は、いわゆる「アベノミクス」の三本の矢により、長い間停滞し続けた国内の閉塞感を心理的に払拭し一部の規制改革も含め、日本が再び成長軌道へ向けて動きつつある様にも見えます。加えて2020年東京オリンピック開催も決まり、日本全体があたかも追い風に乗った様な気持ちになっている人も多いのではないのでしょうか。その事は、決して悪い事ではないと思いますが、果たして本質的に日本は良くなってきているのでしょうか。

先日、ある新聞のコラムに「日本人の生活空間」について書いてありました。要約すれば、今日の日本の財政赤字は深刻で、中央、地方も含め1,000兆円を超える負債がある。国家予算では、税金の割合は5割に満たず、消費税を3%上げたとしてもプライマリーバランス健全化への道は程遠い状況下にある。この様な状況を作ってきた日本人の特性を考えた場合、一般的な日本人は3つの生活空間を持っている様に思える。

1つ目は甘えのきく身内の空間で、自己に一番近い空間
2つ目は遠慮のいる知人の空間で、自己に二番近い空間
3つ目は見知らぬ他人の空間で、自己に一番遠い空間

そしてこの3つ目の他人の空間においては、ほとんどの人がその存在を「無視」または「無遠慮に立居振舞」となる。ほとんどの日本人の持っているこの3つの生活空間の中では、未来の日本人は見知らぬ他人の領域に属すると思っいるのではないか。その日本人独特の特殊な感覚が、今日迄日本の財政状態を悪化させ続け、その負の遺産を次世代へ負わせる事を深刻に考えもせず、今日また一時的な追い風に惑わされ、バブル的発想の人が増えてきている事は、果してこれで良いのだろうか、といった内容でした。

皆さんはどう思われますか。

中国の古典の「大学」に「徳は本なり 財は末なり」という言葉があります。財という字の「貝」はもともと貨幣の代わりに使われていました。これに「才」がついて「財」となりますが「才」には「伎き」という意味とともに「わずか」という意味もあります。

つまり財というものは全体からするとわずかな存在であり本質的な問題ではないのです。あくまでも「徳」が「本」なのです。「徳」とは私心をおさえて利他心を持つ事で、人間の「器」でもあります。

今日の日本の根源的問題は、才能のみを重視し「人材」「人財」の教育に終始し、「人物」の育成を怠ってきた事にある様に思っております。結果、「才」は有っても私利私欲や近視眼的判断で「徳」の薄い人達が日本の指導的立場にあった事が、国家や組織を本質的に誤った方向へ導いてきた様に思っております。

論語に

「性相近きなり習相遠きなり。」

という言葉があります。

(人間の性質は生まれた時にはほとんど差がないけれども、学びによって大きく隔ってくる)そしてこの学びというのは、人間が生まれながらにして与えられている「徳性」を育成する「人間学」を言っているのであって知識、技術を習得するための学問は「芸」と言って重くとらえていません。

今後日本は2020年の東京オリンピック開催までは、経済が表面的には上向き、心理的には一見明るい時代が続くかもしれませんが、これは日本に残された最後のチャンスでしかないと思っております。この残された7年間で我々が本気で取り組まなければいけないのは、日本人の「徳性」の教育で、その事が次世代に「人物」を輩出させ、将来日本を立て直していく根源的活力となってくるものと考えています。

生年は百に満たれどもただ千歳の愛を抱く

(人間は生きても百年、しかし、千年後の後世の人達の事まで考える生き方をしなければいけない)

という生き方を出来る日本人が1人でも増えてゆく事が、根本的に本当の日本の再生へつながってゆくと思っております。

徳真会グループ

理事長 松村 博史